



miho Hatanaka,

助産師であり臨床心理学博士である私は、性教育や母子保健指導、また対人援助専門職の学生への心理学の講義などを通じて、人の誕生だけではなく、人と人との関係やそれぞれの発達段階にある人の生き方、また「生きるとは」・「死ぬとは」・「しあわせとは」といったことを日々考え、触れ続けているように思う。

そのような中で気づいたことや、保健指導の現場でのひとコマ、これまでに書いた文章や発表した論文の要約など、“心”と“いのち”に纏わる短いエッセイをここに記す。そして“挿絵”として、小さな絵（画、写真 etc.）を一枚と。



今回は、2年前に亡くなった父の前夜式（仏式でいう通夜）での参列者へのあいさつの文章と、亡くなって2週間の頃に書いた詩を一編。

【第1話 父の死に】

この原稿を、長く、読み返すこともなく過ごした。

父が逝った冬の日、穏やかな晴れの、病室からは父の好きな虹も見えたその日のことは、はっきりと覚えている。

読み返すことがあるともないとも、考えたこともなかった。

でも、ふと。

この文章を書いている“今”のこの瞬間、“喪の作業の一コマ”に在ることを思う。

喪主の母・〇子に代わりまして、私・長女的美穂がごあいさつ申し上げます。
本日はお寒い中お越しいただきましてありがとうございます。
このように多くの皆様にお別れの時をともに過ごしていただきまして、父も喜んでいることと存じます。

1月〇日〇曜日、〇時〇分、母と私たち子、そして孫がそろい傍にいる中、父・〇は、最後の一呼吸を静かに吸い終えました。
それは悲しい瞬間には違いなかったのですが、不思議と穏やかで、その場にいる誰もが十分に父の死を受け入れることのできる時間でした。そのような時を与えてくれた父に、心から感謝しています。これから先は、母そして家族のことを見守ってくれることと思います。

私事で恐縮ですが、私は助産師として人の誕生に携わる機会がございます。ここ数日の父は、陣痛の痛みに耐えるかのように、苦痛と穏やかな眠りを交互に繰り返していました。またその姿は、だんだんと赤ん坊に還っていくようでもありました。

人が産まれるときには赤ん坊には必ず母親がいて、ひとりぼっちであるということはありません。しかし死というのは、ひとりで迎えることもあると思うのです。そのことを思うと、父はここ数日、母をはじめ最も身近な者たちをみな傍に集め、一人になることなく死を迎えられ、娘としては救われる思いです。私からいたしますと、ロウるさくわがままな父ではありましたが、そのわがままさで、上手に人に甘えることのできる、幸せな人であったのかもしれないと思います。わがままも、ある意味ではもって生まれた才能ではないかということさえ思ったりします。

本日ここにお越しいただきました皆様には、父は特に多くのお力をいただき、わがまかも叶えていただいていたのではないかと思います。心苦しい思いもいたしますが、父に代わりまして、深くお礼を申し上げます。

長期間患っておりましたので、皆様には随分ご心配をおかけいたしました。
しかし、最期に笑みを浮かべ、すべてを委ねてみんなを安心させるように息を引き取った様子を見ると、苦しいだけの闘病期間ではなかったのではないかと思います。
弱く生きた人ではなく、生きることに強い思いを持った人であったことを感じます。皆様の温かいお気持ち、父にも、また私たち家族にも、どれほど大きな励みになったか知れません。

ここに改めてお礼申し上げます。
本日は本当にありがとうございました。

【父のうた】

「お父さん」

と、

言ってみた。

ほんの2週間前、私はまだ、父に「お父さん」と呼びかけていたのだ。

だから、同じように。

でも。

「お父さん」と呼ぶ人は、
私にはもう、いなくなった。

父が亡くなるとは、
こういうことなのだ。

そのことを初めて知って、
私は涙が出た。



Kenpai